【震災支援】

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト報告

ボランティアセンター長補佐による総括

はじめに

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災後、2011 年度の本学のボランティアセンターの被災地支援活動「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトが創成期であるとするならば、2012 年度の活動は発展期に入ったと総括できるだろう。その理由は 2012 年 3 月に本学と大槌町が「ボランティアに関する協働連携協定」を締結したこと、本学保証人会や校友会、同窓会によるボランティアセンターの被災地支援活動に対する経済的に支援されたこと、そのためボランティアに参加する学生の交通費が補助されるようになり、メディアなどでも災害や被災地の報道が減少する中でも、「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトの岩手県大槌町（吉里吉里）と宮城県気仙沼市の活動に参加するボランティア学生数は前年比を上回っていることである。

学生たちは被災地でのカウンターパートとなる住民の方からの要望を聞きながら、自ら考え、話し合い、実践してはその経験をふりかえり、また改善して継続的に実践する、という活動を展開してきた。それだけでなく 2012 年度は、岩手県陸前高田市への被災地と社会企業と明学生ボランティアと都会の子どもを連携させた新しい活動「かわいい子には旅をさせよ」も 2012 年 8 月に行われた。

本報告では、2012 年度の「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト活動の概況を紹介した後、今後の課題を提示してまとめとしたい。

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト学生ボランティア活動

（1）大槌町吉里吉里地区における対口支援

「明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム」は、前述の「ボランティアに関する協働連携協定」を基に対口（ペアを組むという意味）支援活動が継続的に展開されている。

① 支援活動

大槌町、特に吉里吉里地区を中心に、2011 年度から継続している活動の、吉里吉里の言語や文化を伝える「アーカイブ活動」、吉里吉里の復興のあゆみを伝える冊子を制作する「アーカイブ活動」、吉里吉里小学生を対象とした「わんぱく広場」、吉里吉里中学 3 年生を対象とした「学習支援」、森林保全や被災した木材の薪割りを行う「薪プロジェクト」、仮設住宅および在宅被災者を対象とした「仮設住宅支援」の他、学生の発案で 6 月と 11 月の 2 回のスタディツアーも行われた。現地の要請に基づいた支援ボランティアで大槌町を訪れるのではなく、被災地のキーパーソンの方々に講師になっていただき、学生が被災や復興の経験を学ぶこと、復興途中の漁業関係者を訪問し、海の幸を堪能しながら、水産加工物を買い物することによる支援などを目的とした。2012 年 12 月現在、2011 年度からの累計で 44 回の約 400 名の学生が参加した。春期活動参加予定者は、休暇中の参加者数としてもっとも多い

約 80 名の申し込みがあり、冬期活動参加者と合わせると 2012 年度末までに、のべ約 500 人弱の学生が同活動に参加することになる。

2012 年 5 月に完成した吉里吉里の復興のあゆみを伝える「アーカイブ活動」で学生が自主制作した冊子『吉里吉里から～今、伝えたいこと』の完成のニュースは朝日新聞や岩手日報、河北新報等に掲載され、全国から多数の送付依頼が相次ぎ、増刷を繰り返した。

そのほか、10 月 20 日は 白金台児童館の「わんぱくまつり」で、吉里吉里の森林の木片をつかったワークショップを子ども向けに実施し、東京の子どもたちと吉里吉里を結びつける試みを開始した。

② 吉里吉里における明学ボランティア活動のインパクト調査

大槌町と協定を締結し、複数のグループがほぼ毎月吉里吉里を訪れるようになり、吉里吉里からは明学生による継続的な支援に対する好意的な声が寄せられる一方、一年あまりではあるが吉里吉里での明学生による活動に対して、地域の人々や活動の対象者はどのような影響があったのか、どうしたらよりよい活動に改善していけるのかの声を聞くためのインパクト調査を実施した。インパクト調査は、センター長補佐とコーディネーター、臨時雇用のアシスタント・コーディネーター（AC：明学学部時代に吉里吉里での被災地支援ボランティア活動に参加した大学院生）を中心に企画され、AC がボランティア参加学生とともにキーパーソンにヒアリングしたり、中学校教員へのアンケート調査を行った。そのほか、大学執行部（学院長、学長、副学長）へのヒアリングも実施した。調査結果については、吉里吉里の活動報告に記載している。

③外部助成によるボランティア活動を通じた学生の学びの側面支援

「明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム」では、AC の人件費や活動諸経費のために、電通育英会の人材育成事業から「明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラムにおける PDSA サイクルの導入を通した社会的インパクトと学生の学びと成長の促進」と住友商事の東日本再生ユースチャレンジプログラムから助成金を得ている。住友商事からの助成に対しては 12 月 1 日に住友商事主催の中間報告会ではコーディネーターと学生代表が中間報告した。

そのほか、電通育英会担当者ら学内外関係者を招き、2012 年 12 月 8 日に、「Do for Smile @東日本」プロジェクトが岩手県大槌町・学生・大学にもたらした影響と協働の未来を考える目的のシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、まず、吉里吉里で活動する 6 グループによるそれぞれ現地の変化するニーズに対応しながら試行錯誤してきた充実したボランティア活動報告や課題を発表した後、筑波大学唐木清志教授からの講演「復興支援活動から学生は何を学べるか」、大槌町教育委員会の伊藤教育長から「今後の大槌町での学校教育のあり方」として、ふるさと科の新設や小中一貫教育など独自の教育方針と本学のボランティアの可能性についてお話いただいた。助成金を有効に活用した充実したシンポジウムとなった。

（2）気仙沼（宮城県）：他機関との協働型支援

宮城県気仙沼市の被災地復興支援ボランティア活動は、大槌町での対口支援とは異なり、東北学院大学が主導するプログラムへの参加および大学間連携災害ボランティアネットワークという気仙沼市内のさまざまな地域でさまざまな支援を各大学が担当するという他機関との協働型被災地支援である。本学のボランティアセンターからは、唐桑地区１回、七ヶ浜地区２回の合計３回、延べ 18 名を派遣した。

唐桑地区では唐桑半島で被災した古道や遊歩道や漁港の整備を行い、七ヶ浜地区では東北学院大学から紹介された NPO レスキューストックヤードとの連携で住民への足湯サービスを提供した。この協働型被災地支援は現在も活動に加わる大学が増えており今後も継続される。

この協働型被災地支援活動を土台にし、2012 年秋より本学独自のプログラムによる活動を大島地区で行い、７回延べ 49 名を派遣した。大島地区ではほぼ毎月、継続して仮設住民支援、中学校の行事・部活支援、観光活性化のための観光客向け音声ガイドを作成したりしている。

（3）陸前高田（岩手県）：社会企業と社会啓発型支援

復興支援は、被災地で経済および人の循環が良くなることと考える現地企業、地域社会経済復興を支援するソーシャルビジネス団体、「被災地を忘れないで」という声に応えようとする明学生が、東京や神奈川に在住する小学生を対象に、被災の記憶、防災教育、復興支援を目的に、2012 年８月 19 日から 22 日までの３泊４日のツアーを実施するという学生が主体となって企画し 2012 年度から始まった新しい形態のプログラムである。参加する小学生の子どもは、朝日新聞や読売新聞に掲載された案内をきっかけに小学校高学年生の 23 人が参加した。

往復バスの３泊４日の活動内容は次のとおりである。奇跡の一本松の見学、防災に関する講義、被災者からの話を聞き、その後にチームで自主的なボランティアを考え、その活動を実践し、４日間の「かわいい子新聞」を発行するなどである。

（4）合同報告会および吉里吉里活動報告会

2012 年度は、８月、９月に実施した上述の３つの「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト被災地支援活動参加学生による合同報告会が、10 月 27 日に本学白金キャンパスで開催された。これまで同じボランティアセンターの被災地支援に関わっていても、同じ場に集うことなかったが、この合同報告会は互いに刺激を与え合った。

今後の課題：ボランティア活動の「広がり」と「深まり」

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトボランティア活動の今後の課題は、ボランティア活動の質的な「広がり」と「深まり」であると考える。

今後の質的な「広がり」は３つの課題をあげることができる。まず、支援活動の部分的統合発展の広がりである。これまでグループ毎に進められてきた支援活動をあえて相互乗り入れ的な活動として展開することである。2012 年度後半には、学生たちもこの点を自覚し始め、吉里吉里で「薪プロジェクト」と「わんぱく広場」の合同活動で、小学生が吉里吉里の森での活動を一緒に企画したり、中学生への「学習支援」と吉里吉里の文化、言語、復興に対する関心をヒアリングする「アーカイブ」活動と合同活動するなど展開しつつある。

次に、支援する人と支援される人との関係を固定化せず、学び合う、協働する内的な広がりである。たとえば、被災地での被災者らの語りや被災時の経験が学生に伝えられるとき、学生たちが自分の地域やコミュニティについて考えられる､社会に関与していく者として共に働く意識（シビック･エンゲージメント）をもちつつある。同じ時代を生き、社会を構成する一員としての社会的関与の意識を内的に広げることが第２の質的な広がりの課題である。

最後に、国際化への質的広がりである。ボランティア活動に携わった学生の海外留学や、正規留学生や交換留学生の被災地ボランティア活動への関心も高く、今後はローカルな活動を国際的に発信したり、被災地での国際的な支援の可能性が広がる萌芽的状況にあり、今後の質的な広がりの展開が期待される。

また深まりとは、ボランティア活動を通した気づきや学びを意識化、具体化することである。ボランティア活動は学生の集団行動でのリーダーシップや企画力、交渉力、コミュニケーション能力などさまざまな能力の向上や、人を思いやる、生命の重要さを知るなどの感性（感覚的能力）の向上にも寄与し、人格的成長を促進する。しかし、参加学生の増加や被災直後からボランティア活動に参加した第一世代から次世代に参加学生たちの意識も変化していることから、ボランティア活動準備のための学びの機会の提供、ボランティア活動を通した気づきや学びを改めて意識化、具体化することが必要であると考える。

具体的には、被災した人々とコミュニケーションをとるための「聞く力（アクティブ･リスニング)」やグループ活動を実践する際の「ファシリテーション」のスキルの習得や､「学び」の具現化、個々の学生の個々の専門的な問いを学部など学びの共同体と結びつけていくことなどである。2013 年度は明治学院創立 150 周年を迎える。大学の理念である “Do for Others” を体現するひとつの機関としての役割を自覚して果たしていきたい。

（齋藤）

【「Do for Smile@東日本」プロジェクト～明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム～】

東日本大震災から一年以上が経過した、2012 年度は 55 回のべ約 500 名の学生が岩手県大槌町にて復興支援に取り組んだ。今年度は、学生と地域の関係構築が進んだことから、小学校運動会、祭、PTA 行事といった吉里吉里地域のイベントに誘われる機会が多く、改めて継続した活動の重要性に気づくこととなった。またこれまで築いてきた大槌町や吉里吉里と学生、及び大学の信頼関係が地域復興に向けどのような影響を与えるのかを考える年となった。具体的には、吉里吉里地域や大学関係者への活動に対するヒアリングや、学生自身が「活動から何を学んだのか」を振り返る試みが行われ、地域のニーズや課題、活動意義を認識することができた。「吉里吉里で出会ってきた方とまた会いたい。彼らの力になりたい」という学生の想いを原動力とした活動は、大槌町や吉里吉里の方々やボランティアセンターをはじめとした大学の支援を受け、より大きなプロジェクトとして発展してきた。以下は各プロジェクトの報告である。

わんぱく広場　震災により安全に遊ぶ場を奪われた子どもたちに、遊びの場を提供することを目的としている。主に小学校の体育館や校庭で、科学実験や工作をはじめ、スポーツやミサンガ作りなど様々な遊びを行っている。活動をしていくうちに、子どもたちは、大人には言えないような気持ちを学生に話すようになった。また保護者のレスパイトケアにもつながっているとの声をPTAから伺っている。今後は、他セクションとのコラボレーション企画や地域性を生かした遊びを取り入れていきたい。 （社会福祉学科１年　市川）	**学習支援活動**　学習支援の活動は、吉里吉里中学校の生徒たちを対象に授業サポート、テスト前の学習会、宿題のお手伝いを行っている。今年度はこれまで築いた信頼関係や大学生という立場を生かし、自主学習の定着、勉強の楽しさを感じてもらうということを目的としてきた。さらに中学生が修学旅行時に明治学院大学を来訪するなど、双方向的な活動も展開した。来年度は中学生と地域とつなげる取り組みなど、中学生に復興を担う次世代の存在であるということを意識してもらえるような活動もしていきたい。 （社会学科３年　内田）
仮設住宅支援　この活動は震災によって分断されがちな地域内のつながりを作ることでコミュニティづくりのお手伝いを目的とする活動である。私たちは「お茶っ子サロン」を開いたり、地域の方から郷土料理を習うなどして、交流の場を作っている。今年の夏には今まで参加者数が少なかった自宅生活者の方や子どもの参加が見受けられた。私たちが地域に入ることにより、少しでも住民同志をつなげられればと思う。今後は世代間交流をも取り入れた交流の場を作りたい。 （社会福祉学科２年　水村）	**復活の薪プロジェクト**　私たちは、震災直後から海の再生を目指す「NPO 法人吉里吉里国」のサポートをしている。今年度は子どもたちに森の魅力を知ってもらうため、吉里吉里国と協働で森林学校を開催した。これは次世代の吉里吉里を担う人材育成の意味合いがある。さらに東京都港区の白金台児童館で吉里吉里の間伐材を使った工作をし、都会の子どもが自然に触れる機会を創った。私たちはこれらの活動を通し、「人と自然の架け橋になる」という活動目標を掲げることとした。今後も地域に寄り添い、人と自然の架け橋となるため、活動を続けていきたい。（経済学科１年　松浦）

吉里吉里の言葉・文化のアーカイブ活動	復興の歩みのアーカイブ活動
吉里吉里の文化を残すことで自身に誇りを持ってもらい、復興への力にしてもらうことが活動の目的である。今年度は学生主体で「吉里吉里クラブ」を開催し、地域内で笑い声が聞こえる場をたくさん作れた。「若い人たちと話すのは新鮮だ」と言っていただいた。震災後、家に引きこもってしまう住民の方も含めて、たくさんの方が外出して交流するきっかけづくりができたと思う。また学生の夏祭りへの参加は、吉里吉里と学生の距離を近くし、「明学生は吉里吉里人」と呼ばれるようになった。今後は好評だったスタディツアーも継続的に実施し、学生の関心を喚起し続けるとともに、地域の方々を繋げる役割を担っていきたい。 （消費情報環境法学科１年　上口）	吉里吉里の“今”を未来の吉里吉里人に残すこと、地域外の人にも吉里吉里の魅力を伝え、ファンを増やすことを目指して、「吉里吉里から～今伝えたいこと」の制作に取り組んでいる。第１号は震災後住民が避難していた吉祥寺の住職や海の再生に取り組む地域のリーダー等のお話をまとめた。これは地域の住民や復興支援に訪れる多くの方に読んでいただき、さらに複数の新聞に掲載されたことで、全国に5000部以上配布することができた。今後は大槌町の小中学校で導入が予定されている「ふるさと科」の教材としても活用されるという話も進展している。目下、第２号を制作中であり、さらに吉里吉里の方が主人公となるような冊子づくりを目指している。 （心理学科１年　大平）

2012年夏に、私たちは活動目標を話し合い、「震災復興支援活動を通じて築く『笑顔』循環型社会の実現～吉里吉里は復興し、学生は成長し、大学は社会に開かれる～」と掲げ吉里吉里で活動するための意義を確認した。来年度は町の復興が本格化していく中で、学生にしか出来ない支援をさらにしていくことが重要だと考えている。復興に向けて地域が団結しなければならない時に、地域のしがらみがその妨げになることもあるが、そこに学生が入ることによって、地域の中でのつながりをさらに深めるきっかけとなるようにできればと思う。また、活動を通して私たちが知った、吉里吉里の方の暖かさや自然の豊かさといった地域の魅力を再認識する場も作りたい。そうして、地域に誇りをもってもらい復興の後押しをしたいと思う。

（社会学部社会福祉学科２年　宮本、国際学部国際学科２年　島澤）

「吉里吉里語辞典音声アーカイブ」活動の様子

「わんぱく広場」活動の様子

「Do for Smile @東日本」プロジェクトが、岩手県大槌町・学生・大学にもたらした影響～吉里吉里地域・学生・大学への調査から

１．調査の背景と目的

2011 年３月の東日本大震災発生以降、「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト「明学・大槌町吉里吉里プログラム」においては、活動総数 55 回のべ 500 人の学生（2013 年３月まで予定を含める）が復興支援活動に携わっている。これは、ひとつの活動としてはセンター発足以降最大の参加学生数と活動期間となり、現在もなお関心をもつ学生、現地からの支援要請は増加している。2012 年３月には明治学院大学と大槌町が協定を締結し、今後継続して大槌町を支援すること、復興支援活動が学生の学びの機会として相互に協力関係を築くことが確認された。本プログラムにおいては、その目標を「震災復興支援活動を通して築く『笑顔』循環型社会の実現～大槌吉里吉里は復興し、学生は成長し、大学は社会に開かれる、３者のつながりが、笑顔を作り、社会を変える」と掲げている。本調査の最終的なねらいは、本プログラムが「学生の学びと成長」、「大槌吉里吉里の復興」、「開かれた大学づくり」にどのような影響（インパクト）を与えているか包括的に検証することで、大学／ボランティアセンター／学生というアクターが復興支援活動に携わる意味を明らかにすることをねらいとしているが、本報告はそうした目的の下に進められた試験的な取り組みである。調査の設計にあたってはアメリカの Campus Compact（全米約 1000 の大学が加盟する、サービスラーニングの研究・実践の推進機関）が発行している “Assessing Service-Learning and Civic Engagement”（2001）の枠組みを採用した上で、地域やプログラムの特徴を踏まえて検討し、独自の質問項目を作成した。調査の詳細は別途作成している『「Do for Smile @東日本」プロジェクト「明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム」報告書』にて掲載する予定としており、本稿では概要について報告したい。

２．調査の概要

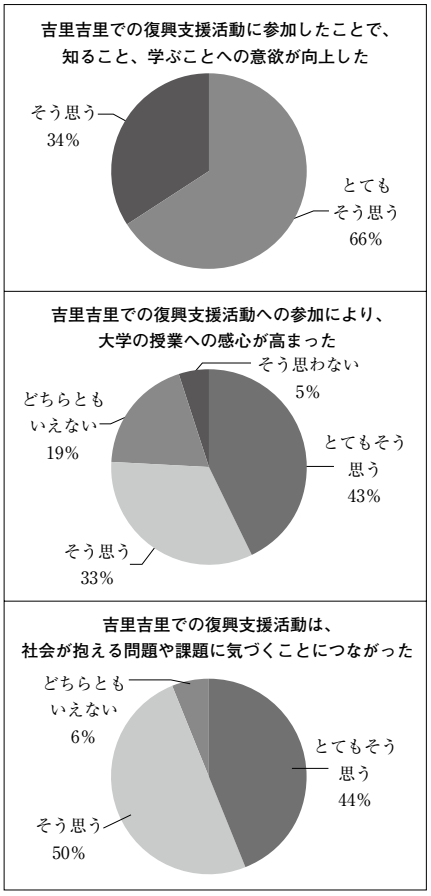
【大槌町・吉里吉里地域への聞き取り】岩手県大槌町吉里吉里地区に住む 14 名。2012 年８月～ 10 月に実施。
［対象］プログラム実施におけるキーパーソン（老人クラブ会長、保育園の副園長、お寺の住職、NPO 代表等）及び上記以外の地域におけるキーパーソン（伝統的な祭りのリーダー、老人クラブ会員等）
［方法］対半構造化インタビュー。センター教職員に加えて、プログラム参加学生の関わりを促すことで、参加学生自身が、地域からの声を直接聞き、地域にもたらした影響や新たなニーズ、課題等の理解を深める機会となるよう配慮した。
【吉里吉里中学校の生徒（中学３年生 32 名）、教職員 12 人、中学３年生の保護者 24 人】 2012 年 10 月に実施。調査結果は上述の報告書に記載。
【参加学生へのアンケート】［対象］2012 年度夏期活動参加学生（事後ミーティングにて調査票を配布）配布数 43, 回答数 32,（回収率 74.4%）。学年：１年 12 人、２年 15 人、３年３人、４年１人、大学院修士課程１年１名。性別：男子 17 人、女子 15 人。　学部：文学部３人、経済学部３人、社会学部８人、法学部８人、国際学部８人、心理学部２人
【大学執行部への聞き取り】［対象］明治学院大西晴樹学院長、明治学院大学鵜殿博喜学長、井上孝代副学長
［方法］半構造化インタビュー。聞き手はセンター教職員と学生。2012 年９月～ 10 月に実施。

3．調査結果 【大槌町・吉里吉里地域への影響】 学校関係者や住民等の主な声

わんぱく広場 ガラスの破片が刺さるため遊ぶ場所がなく、仮設住宅に住んでいる子どもは、物音を気にして騒げずにいる。思い切り騒げるわんぱく広場は子どものストレス発散にも非常に重要だ。 子どもは初め緊張気味だったが、今は明学生が来るのを楽しみにしている。学生を信用し、時にはあまり人に言えない悩みを打ち明けている。遊ぶ場だけでなく子どもが育つ場として学校と違う役割を果たしている。親へのレスパイトケアにもなっている。
学習支援 子どもは「復興っていうけど、全然復興してねーじゃん」って言う。こんななか、定期的に来て顔を見て話をしてくれるだけで、子どもの支えになっている。大人は仕事があったりなかったりで不安定。それが中学生にも響いている。高校に行かせてもらえるんだろうか、と将来に対して不安になっている。 大学に興味をもった。大学生って勉強だけでなく、いろんなことをやっているんだなって、孫は言っています。
薪プロジェクト 明治学院は津波の直後から、被災地の現場でいろんなお手伝いをスタートさせてたっていうのが、素晴らしい。吉里吉里、被災地の人になろうとして活動している。これからも、「お手伝いしてあげる」じゃなくて、「お手伝いをしてもいいですか」っていう感じでいいんじゃないですか。仮設住宅の人たちのお年寄りの人たちに話しかけたり。中学生とか小学生とか、保育園にも接しているような、今までの態度がいつまでも続いてほしい。その中から学生は一生懸命に自分で何かをつかむ。被災者を助ける人っていう関係じゃなくて、ともに学びあう仲として、ともに今この瞬間に、心が通っているんだ、生きているんだと、そういう体験を、しっかり来る度に味わってほしい。うちのスタッフはみな全てのものや人を亡くしたりしている。そういう連中がですね。明学生さんの態度、薪を割る姿、笑顔からね、いかに立ち上がる勇気をもらったか、それは計り知れないです。下ばかりを見ていてうつむいていてちゃダメだって、やるしかないんだっていう勇気ですね。明学生は無言のうちに俺らにそう言ってくれている。
住民の生活支援（仮設住宅支援を含む） 家がある、ないで気持ちの差がすごく出てきている。避難所の時からね、家残った人たちは、洗濯物でさえ干せない状況だった。明学生へのお願いは、被災地に住んでいる人の気持ちも変わってくるし、求められるニーズっていうのも変わってくると思うけれど、とにかく長く継続して寄り添ってくださることが、一番ありがたいことだなって思います。
復興の歩みのアーカイブ活動 学校だよりで紹介しました。文化祭のときに手にとって、みんなよく読んでいましたよ。 将来は小学生でも手に取れるようなものになれば、ふるさと科の教材にもしたい。 みんな食事を待っている間に手にとってよく読んでいますよ
吉里吉里の言葉と文化のアーカイブ活動 お祭りにも違和感なく入って一緒にお囃子をしたり踊ったりしたでしょう。明学はすっごく評判がいいよ。お祭り後に反省会があったんだけど、明学さんはすごいって。
全体を通して 明学生が来ることで一番変わったのは、笑顔が増えたところ。 本当に生きる知恵をもらったよね。 明学の活動は各プロジェクトが分離していて、点と点の状態。世代などを超えて、点を線にするのが、学生の役割だと思うし、学生の存在が人々をつなぐきっかけになれると思う。

【学生への影響】参加学生へのアンケート結果から（一部を抜粋）

2012 年度夏期活動の参加者へのアンケートから、復興支援活動への参加は学生へ多方面に影響を与えていることが分かった。第一に「学び」に対する意欲の向上である。復興支援活動への参加した学生全てが「知ること、学ぶことへの意欲」が向上、76%が「大学の授業への意欲」も向上したと回答した。第二に「社会への問題意識」の深まりである。参加学生の 94%が「社会が抱える問題や課題への気づき」や「社会に貢献したい」という意欲の向上があったと回答した。第三にコミュニケーション能力やリーダーシップ力などの能力の向上や自己理解への深まりである。「協働する能力」は 94%が、「考えを伝える能力」は88%、「困難を乗り越える力」は75%、「リーダーシップ能力」は 66%の学生から向上が見られたという回答が得られた。さらに、93%の学生が「先入観や偏見への気づき」があった、85%の学生が「自分の強みと弱みを理解」としたと回答しており、復興支援の経験が自己理解の深まりにも影響を与えている様子が伺えた。第四にキャリアに関する影響として、43% が今後携わりたい職業を明確にするのに役立ったとしていた。



【大学への影響】執行部への聞き取りから（インタビューの抜粋）

明治学院大学　鵜殿博喜学長

A：ボランティア活動が受ける人だけでなく、学生に大きな意味を持っているのを感じた。“Do for Others” に貢献しているのはもちろんですが、みなさんの人間としての成長に大きな貢献をしている。

B：持続的に活動をしてもらうこと。そうすると問題意識が出てきて、それが重要です。何かしなければ疑問や悩みは出てきません。何もしなければ何も生まれないのです。ゲーテの言葉で「人間とは努力する限り迷うものである」とあります。迷うというのはよいことですよね。みなさんは貴重な経験をしていますね。

明治学院　大西晴樹学院長

A：他者への貢献、隣人愛の精神だと思う。キリスト教の倫理というのは、教室で叫ぶのではなく、行ってしなさい、ということがなければ、実際の教えにはならない。大槌での活動というのはまさにそうです。このプロジェクトは、まさに教育理念を推し進めている、発展させている。

B：ボランティアに行くだけでなく、続けていくことが重要。そのための連携協定だった。うまく言語化して記録を残してほしい。そうでないと明学の歴史の中に蓄積しない。学生がしなければいけないことは問題発見・問題解決、そのための学問的ディスプリンとの往復。専門家が学校にいるわけだから、うまくオーガナイズして、問題発見・解決の場にそれをもってくる、もちかえることを大学がすべきこと。往復運動がないと。それがないと学生は成長しないと思う。大学だからそれを目指していかないと。

明治学院大学　井上孝代副学長

A:：ボランティアセンターの活動は、大学の教育理念の他者への貢献ということを具体的に見せてくれることで可視化できる。それは大学にとっても、学生にとっても、地域や社会にとっても、明治学院大学のあり方の具体的なメッセージとなっている。学生が主体的に動いているという活動そのものが大学の教育理念を具体化している。だからこそボランティアがボランティアセンターがすごく活躍しているのはすばらしいことだと思います。卒業生の方たちも、東北支援の話など学生たちの活躍を聞いてね、その話を聞いてほっとして、にこやかな顔になりますね。

【まとめ】

本プログラムに対する大槌町並びに吉里吉里住民の受け止め方は「笑顔が増えた」と子どもたちは「楽しみにしている」「支えられている」というように概ね肯定的な声が多く聞かれた。特に、復興の段階によってニーズも変化するなかで「長い時間に寄り添ってほしい」と、多くの方が語っており、大学執行部もそれを期待していることが分かった。さらに、被災状況の差により生じた住民同士の関係悪化の問題や震災による高齢化の進展、被災した小中学生のケアなど、地域だけでは解決が困難となった諸問題への解決の手立てとして、学生が一定の役割を果たしていることも確認された。子どもたちにとって学生は、地域の大人には言えない悩みを相談したりロールモデルになっていること、震災により生じた地域内の軋みを緩和する役割があることも分かった。一方、学生の力を地域の復興に生かすためには、学生がおこなう6つのプロジェクト間の協力が不可欠であること、活動から学生がどんなことを感じているのかを丁寧に地域へとフィードバックすることが求められていることも、明らかになった。こうした声に応えるべく2012年秋以降には、プロジェクト同士で連携した活動が活発に進んでおり、世代間の交流を促進する活動、仮設住宅や自宅生活者など、多様な立場にある住民同士をつなぐ活動などが積極的に進んでいる。大槌や吉里吉里に対するフィードバックとしては、ボランティアセンターと大槌町・教育委員会の共催で「明学生からありがとうを伝える会」を2月に開催することとなっており、大槌町や吉里吉里の住民と学生、大学等が密に協議を重ねがら、活動が進むように工夫している。学生へのアンケートからは、復興支援活動の経験は学生の「学ぶ意欲の向上」や「社会への問題意識の深まり」等、プラスの影響をもたらしていることも確認された一方、復興支援という社会の最前線における経験から得られた問題意識が大学におけるアカデミックな学びやキャリア形成と十分に接続できていないという課題が明らかになった。今後は学ぶ意欲の向上が大学における学びへと有機的に結び付けられるような大学としての体制づくり、特に大西学院長が指摘するように、学問のディスプリンとの往復へと連動していくような、プログラムの発展が期待されているともいえよう。さらに社会貢献の意欲の高まりがボランティア活動はもちろん、仕事を通しての社会貢献にも生かされるようなキャリア形成の支援なども求められていると言える。来年度は創立150周年事業として「ヘボン吉里吉里未来塾」として、教育や心理、経済や政治、福祉やボランティアや社会起業等の専門家とともに、学ぶ講座を開設することとなっており、復興支援とインターディスプリンの学びの場が接続することで、学生の視野が広がり、学び・成長と活動の充実化が進むことを期待したい。（市川）

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム～
気仙沼大島復興支援プログラム

【はじめに】

気仙沼大島では６月 30 日～７月１日に活動を開始してから毎月支援を継続している。私が初めて大島に訪れた時にボランティアに求められていたものは継続的支援であった。さらに大島は観光の島である。私たちが島を訪れ、島のことを知り、伝えていくことが観光地としての復興につながっている。

【活動報告】

７月から９月の活動では島の旅館「明海荘」で草刈りや薪割り作業、島の中学校で部活動交流や学習支援を行った。10 月は島の中学校からの要請で文化祭の手伝いをした。大島には高校がないため、お兄さん、お姉さん世代の私たちとの交流を楽しんでくれている。11 月には現地の方の協力もあり、大島全体に活動の幅を広げ、観光地ならではの観光音声ガイドサービスのサポートや、「何でも屋」として仮設住宅へ向けて回覧板を回すという現地のニーズに沿う活動も始まった。

【今後に向けて】

大島では今もなお多くの人が仮設住宅で暮らしており、どこかで我慢を強いられながら生活している。しかしみな明るく、私たちに「来てくれてありがとう」と声をかけてくださる。学生の私たちにできるのは小さなことだが、そんな小さな活動の積み重ねが大島の元気に結びつくと知った。細くても長く大島とつながり、支援を続けたい。

大島で出会った子どもたちと撮影

音声ガイドサービスを使った観光

（学生メンバー　文学部英文学科１年　榎田知尋）

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム～
気仙沼唐桑復興支援プログラム

【概要】

この活動では全国から学生が集まり、60 名が一つ屋根の下での共同生活となった。９月２日から８日までの第５クールには、明治学院大学から９名が参加した。主な活動は古道の整備、漁業支援、海岸清掃であった。空き時間には気仙沼周辺・陸前高田・南三陸町を視察した。

【活動内容】

古道の整備では、観光名所であった唐桑半島の先端に位置する古道の一部を整備した。この古道は津波ではなく、地震による被害を受けていた。雑草が生い茂っていたので、草刈りを中心に清掃活動を行った。漁業支援では、シャンティ国際ボランティア会の方の仲介で気仙沼の港で漁業支援を行った。津波の甚大な被害を受けたこの港では、一番人手を必要としている漁業ロープの清掃活動をお手伝いさせて頂いた。海岸清掃では、気仙沼復興協会の清掃部の活動に参加し、元は防風林と海水浴場だった海岸を清掃した。がれきは布や漁の網、家財などから動物の骨まで多種多様であり、拾ったがれきは細かい分別を行った。

【感想】

私にとって初めての震災復興ボランティアだったが、そこではただ体を動かすだけでなく、様々なことを考えさせられた。津波で流されたものは、初めて被災地に入った私の目にはただのがれきにしか見えなかったが、現地で活動する中で、そのがれき一つ一つに誰かの想いが詰まっていることを実感した。建物や街並みを元通りにすることだけが復興ではなく、現地に赴き人々とふれあうことも復興に含まれると思った。

漁業支援の様子

海岸清掃の集合写真

（国際学部国際学科１年　中村充孝）

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム～
七ヶ浜町仮設住宅支援プログラム

【活動報告】

「震災復興が進み、どのような支援が必要とされているのか、支援の在り方を考える」という事前テーマを念頭に、①七ヶ浜１：2012 年８月 10 日～ 12 日　②七ヶ浜２：2012 年８月 24 日～ 26 日の二部体制に分かれ、七ヶ浜仮設住宅支援での足湯・ハンドマッサージボランティアを行った。

【成果と課題に関して】

足湯・ハンドマッサージボランティアでは互いの肌がふれあう事で、こころの距離が縮まることを学び、精神的ケアの重要性を痛感した。また、仮設住宅で暮らしている地元の方々と直接関わる活動なので、何気ない日常会話から悩みやニーズを聞くことができた。短い時間での支援活動であったが、被災地の現状等の共有をして、現場のニーズと乖離しない支援を考え、学校側の協力も得てプログラムを継続していくことが課題である。こういった目に見えないこころの支援を今後も継続していきたい。

【今後に向けて】

参加した各々が、被災地支援の在り方について、考えを深める機会になったのではないだろうか。この活動を単なる思い出にするのではなく、次に繋げていくことが必要である。今回のような短期型支援の場合においては、支援の質（内容・時間等の調整）の向上を図ることが、今後に向けての核となる部分だと思われる。

仮設住宅での足湯・マッサージ支援

七ヶ浜町復興支援センター

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科２年　内田ひかり）

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム総括

宮城県気仙沼市での支援活動は、2011 年夏に東北学院大学を中心に 10 を超える大学が「大学間連携ボランティアネットワーク」として唐桑地区総合体育館を起点に行った、漁業支援・美術館における文化財再生活動等にさかのぼる。この活動をきっかけに気仙沼市における本学独自の活動が始まった。現在活動を行っている人口 3000 人の大島は市内と比較したところ、観光で生きている島として観光客を受け入れるべくいち早い復興を望みつつも、地域的なハンデから復興の度合いが遅れており、人も重機も不足した状況の中で、島民の団結力とボランティアの支援により少しずつ復興の歩みを進めていた。

2012 年 3 月下旬、島の中央部にある明海荘を拠点として、学生 4 名が旅館の敷地内の緑地再生作業を行った。当時、島の玄関口である大島港周辺では、重機がうず高く積まれて行き場を失った瓦礫の撤去作業を行っていた。港は地盤沈下し大潮になると浸水した。震災から一年が経過した時期ですらこの状況であった。

６月、大島でただ一つの中学校を訪問し、授業参観に参加した。生徒はＡＥＤ講習を消防署員から受けていた。慣れない訓練に生徒は様子をうかがうばかりであったが、講習経験のある学生が積極的にフォローし、実りある講習となった。母親たちが作ったカレーライスを学生が給仕し一緒に食べる頃には生徒も打ち解け、午後の部活の時間には学生は引っ張りだことなった。この活動がきっかけとなり、秋の文化祭では、例年文化祭を裏方として支えるが故に子どもの出し物が見られない母親に代わって、裏方作業を支援した。大島では文化祭も島挙げての一大イベントである。子供の晴れ姿を初めて観ることができた母親に喜んでいただけた。ここでも大島を支えている多くの方と知り合い、現在では仮設住宅で暮らす方の手の届かない部分を手伝う「なんでも屋」、大島の経済を支える農作物の「収穫作業手伝い」、観光拠点として再生させるために「音声観光ガイド作成支援」といった、継続が求められる活動の幅が広がりつつある。

この間「大学間連携ボランティアネットワーク」では加盟校が 27 にもなり、夏期に唐桑地区古道・遊歩道整備、七ヶ浜町における仮設住宅住民に対する足湯ボランティアに本学からも参加し、12 月には東北学院大学で開催されたシンポジウムにおいて学生３名が活動報告を行った。

このように気仙沼大島での支援活動は、この半年で基盤を作ることができたと思われる。これはひとえに継続して活動に参加した学生の努力の賜物である。こうした活動を友達から聞いてか、活動に参加したいという学生は数多いが、さらに拡大するにはまだ早く、しばらくは地元の方からの要請を着実にこなしていく時期であると感じている。当初はボランティアセンターで作られた活動スケジュールに学生が参加していたが､現在では学生自ら地域の方と協議している。ここに彼らの成長を見ることができる。今後地元の要請にどのように応えていけるのか、非常に楽しみである。　（波多野）

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～陸前高田復興支援プログラム～
「かわいい子には旅をさせよ　in　陸前高田　2012」

【コンセプトと目的】

私たちの企画は 2012 年２月に陸前高田で行われたワークショップで本学の学生が、「陸前高田を忘れないでほしい」「子供たちが元気に走り回っている姿が見たい」という現地の声を受けたことから始まった。当初は「現地の子供たちの走り回っている姿が見たい」という要望に応えるため小学校２・３年生を対象に「陸前高田の文化を紹介する」「現地との交流」などを通して、子供たちに対しては震災を肌で感じて被災地とのつながりを感じてもらう、また現地の人に対しては子供の走り回る姿を見て笑顔になってもらうという目的でやっていた。

しかし計画を進めるにつれ、より子供たちに多くのことを吸収してもらうため、また「陸前高田を忘れないでほしい」という現地の声に応えるという目的を達成するために対象年齢も上げ、目的自体も「未来を生きる子供たちが陸前高田の人々と気持ちを分かち合う」から、「現地の方とボランティアで汗を流しホームステイで現地の生活を感じることで今の陸前高田を知る。そして現地の人々が誇りを持って前に進むその姿を共に分かち合うことで子供たちが一回り成長できる」に変わった。コンセプトも「子供たちが陸前高田の文化・伝統・自然に直接触れる」「復興に向けて一生懸命な現地の人々の姿を見て様々な感情を持ってもらい、それを東京に戻った時に家族や友達に伝えられるようにする」から、最終的には「子供たちが、東日本大震災の多大なる被害から力強く復興している現地の人々と共にボランティアや防災教育などの活動を通じ、陸前高田の生きる精神を学ぶことで大きく成長することを目指す」に変わっていった。

また企画内容も、震災学習と陸前高田の文化に触れるということが目的であった。しかしコンセプトを考え直し、より子ども達が成長でき、さらに現在の陸前高田にしかできないようなプログラムにするべきだという理由から、企画内容を震災学習と子どもが主体的に参加することを重視したものにした。

（学生メンバー　国際学部国際学科１年　遠藤瑠里）

【プログラム内容】

１日目のテーマは、「陸前高田とふれあう」である。震災学習やボランティア体験をする前に、まず陸前高田を知ろうという目的である。出発地点である浜松町バスターミナルから陸前高田までの車内では、学生が考えた陸前高田に関するいくつかのクイズを行った。また、今回のツアーの参加者は友達と申し込んだという子ども以外、初対面の子どもたちがほとんどであったため、陸前高田に着いてから高田自動車学校でレクリエーション等のアイスブレイクやバーベキューを行った。

２日目のテーマは、「3.11 を知る」である。被災地の現状を実際に見て体感することで、メディアを通しては伝わらない生々しさを感じてほしいという目的である。そこで午前中は、田村満氏の案内で被災地の現状を見た。実際に被災し、ぼろぼろになった市役所や、多くの方が犠牲になった体育館、跡形もない商店街など、津波の凄惨さを目の当たりにした。移動中、子どもたちの口数は少なく、彼らが受けた衝撃の大きさを物語っていた。また一本松を見た際、田村氏から「一本松を加工するべきかありのままの形で置いておくべきか考えてみて」という問いが投げかけられ、子どもたちはその問いに自分の考えを持って答えていた。そして、この日の午後は長洞元気村という仮設住宅村に行き震災当日の状況を説明してもらった。子どもたちは進んで、今何が必要かを聞き、その中で自分たちのできることを考え、何をするのかを決定した。そして、２日目と３日目の夜は、現地の方のお宅にホームステイをし、津波の映像を見るなど、とても貴重な経験をさせていただいた。

３日目のテーマは、「ボランティア」である。自分たちにできることを主体的に行うことで、子どもたちの成長につなげようという目的である。長洞元気村に行き、実際に津波が来た場所などを案内してもらったあと、２日目に子どもたちで調査したニーズを元に、ボランティアを行った。午前は海岸清掃、昼食準備の手伝い、畑の種まき、午後はかかしづくり、うちわ作り、村についての紙芝居づくり、絵手紙の班に分かれ、活動を行った。元気村での活動の後、陸前高田市内にある花っこ畑という個人が管理している花畑でボランティアを行った。そこで「スマイル」と描かれた花文字の周りの草刈りをした。最後のホームステイの晩は、お世話になったお宅に感謝の手紙を書いて渡した。

４日目のテーマは「レビューとまとめ」である。今回のツアーでは、毎晩その日感じたことや経験したことを子供たちに日記にまとめてもらっていた。この日はその日記を子どもたちに「かわいい子新聞」にまとめ、発表してもらった。また、この日は田村満氏や長洞元気村・ホームステイ先の方が来てくださり、子どもたちの発表にコメントをしてくださった。温かく迎えてくれたホームステイ先の方のやさしさへの感謝や、被災地の状況の悲惨さなど様々な思いがうかがえた。　（学生メンバー　社会学部福祉学科１年　冨原祐子）

【ツアーの成果・反省と課題】

今回のツアーを実施したことにより、大きな結果が見られたのは参加者の子どもたちの意識の変化である。例えば、一本松の今後について「もう楽にしてあげたいね」と答える子がいた。学校のグラウンドなどが仮設住宅で使えないといった話を聞いても「何気なく普段の生活ができていることが幸せだ」といった声を聞くことができた。「かわいい子新聞」でも「人がつらいことに負けずに前を向いて生きていく強さを学んだ」とコメントしていることから、陸前高田の強さを学んだ子が多いように読み取れた。

また、このツアーでは防災教育、ボランティア精神の大切さを伝えられた。防災教育では今回のツアーの２日目に「釜石の奇跡」を基にした紙芝居を発表した。そのキーワードである「つなみてんでんこ」が印象に残っていたということが「かわいい子新聞」のコメントによりうかがえた。首都圏は地震の発生率が非常に高いといわれている現在、地震が起こったら津波を想定して逃げるというこの意識が、非常に大切なものとなってくる。その意味で防災教育において大きな結果となったと思う。ボランティア精神という点では、花畑での活動の際、吉田正子さんから「みんなのおかげで、早くできた」という言葉をいただき、子どもたちからは「もっと人のためになることをしたい」といった声があった。このツアーでは、ボランティアの精神を学んでほしいと考えていたので、子どもたちの反応を見て良い成果が得られたと感じた。

企画の反省としては、全体として３つあった。１つ目は、情報不足により、現地の様子や使用する部屋の大きさ、距離感などが把握できていなかったということである。そのため、長洞元気村では部屋が小さく全員が活動できないという状況になった。現地の下見が不足していたということが原因だ。２つめは、現地と調整する際にメールや電話で済ましてしまい、あとで問題が生じたことである。今後は頻繁に議事録などを現地と共有し、企画の進行状況をお互いに確認できるようにして、進められるようにしなければならない。またスケジューリングの面でも、効率よくミーティングができていないところがあった。これは、実施予定日から逆算したスケジュールを決めていなかったということが理由として挙げられる。アジェンダがはっきりしていなかったということも、今後の課題である。

（学生メンバー　社会学部社会学科１年　畫間雄貴）

岩手県陸前高田支援「かわいい子には旅をさせよ」スタディツアー企画

東日本大震災の被災地は食料配布やがれき撤去など緊急人道支援から復旧・復興支援のフェーズに入った。これまでと違った支援が必要になるのは当然であるが、ボランティアセンターでは、陸前高田市で大掛かりな支援に入っている東京の一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワーク（ＳＢＮ）の活動に注目した。「社会的企業の立場で同じ志を持つ個人が知恵を結集し、つながり、力を合わせて行く日本初で日本発の経済団体」をミッションとしている。行政や企業、大学等と連携しながら、ソーシャルビジネスの育成、拡大に取り組んでおり、その特徴を生かして陸前高田の被災地で経済関係者といっしょに、なつかしい未来創造株式会社を設立した。壊滅的な打撃を受けた陸前高田の復興のために、仮設商店街やバイオマス発電、蓄電ステーション、森の学校、異世代シェアハウス、メモリアルパーク、アーカイブ資料館、フェアトレード・タウン、エコ農業ファームなど画期的な青写真を描き始めていた。

そこで、大学としていっしょに何かできないかと、協力関係を模索する話し合いに入り、地元の人の強い要望で、都会の子どもたちを被災地に連れて行き、防災教育と子どもボランティアをしてもらうことになった。小学生が対象なので、明治学院大学の学生は付添役を務めることになる。

アイデアは良かったものの、実現までにはさまざまな困難が待ち受けていた。

まず、大学として、営利企業といっしょに活動をするということ自体ハードルが高かった。具体的には、ＳＢＮの中核であるソシオエンジン、バス運行と現地手配の岩手観光、地元のなつかしい未来創造はいずれも会社組織である。このため、まずＣＳＲ（企業の社会的責任）を意識してもらい、利益をあげることより被災地支援という社会貢献を優先することを確認し、コストの引き下げに理解をもらった。

次に、大学としても、これはボランティアではなく、子どもの家族から料金をいただく「ソーシャルビジネス」であるとの自覚を持ち、学生にも、社会貢献のための事業というものの存在を理解してもらった。

旅は結局、８月 19 ～ 22 日の３泊４日で、参加したのは関東近県の小学生（４～６年生）24 人。事故もなく無事に終えることができた。父母からは「震災後、子どもに現地を見せたかったが、機会もないし、どうしたらいいかわからなかった。今回の企画はすばらしかった」と高い評価をいただいた。2013 年夏には、さらに充実した内容のツアーを組みたいと考えている。（原田）

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～
福島・エルシステマジャパン

一般社団法人エル・システマジャパンは、エル・システマ式の音楽などの芸術を通し、将来的には困難な立場にある子どもの自己実現の場の拡充を推進することを目的として設立され、相馬市から活動を展開している。ボランティアセンターはエル・システマジャパンの代表の菊川穣氏とコーディネーターとの繋がりからこの活動を始め、相馬市での音楽レッスンのサポートや海外でのエル・システマ研修などを視野にいれ、Do for Smile の福島プログラムとして開発段階にある。

2012 年 7 月後半には明治学院大学白金キャンパスにてエル・システマを紹介するシンポジウムを開催し、世界中に展開するエル・システマの先導者や相馬市市長がプレゼンテーションを行った。ベネズエラ大使を含めた約 80 人が参加し、エル・システマへの理解を深めた。

その後、同月には、同メンバーが開催する相馬市でのワークショップに明治学院大学学生 1 人とコーディネーターが参加し、これから明治学院大学学生がどのようにエル・システマへ介入できるかを念頭に置きながらワークショップを視察した。ワークショップでは、小学校低学年への「紙バイオリン」を作るアクティビティー、高学年の合唱とオーケストラのエルシステマ講師による講習、地元音楽教師へのエル・システマ紹介がされた。

ベネズエラの音楽について話を聞く

紙バイオリン作りに挑戦

ボランティアセンターとして、これからどのようにエル・システマジャパンに参加して行くかの展望はまだ見えていない。7 月の相馬市でのワークショップ時点では、相馬市に、まだエル･システマが根付いていない、いわゆるエル・システマ式の紹介のためのワークショップだったため、エル・システマがどのように活動を展開するかはうかがえたものの、学生が介入するニーズが見えてこなかった。相馬市でのエル・システマが浸透してきている現在、担当学生は代表の菊川穣氏と徐々に連絡を取りつつ、今後の展開について探っている。近いうちに、ニーズ調査のため現地を訪問したいと考えている。エル･システマは平日のみの活動なため、またリーダー学生とのスケジュールの関係で、2013 年 2 月にコーディネーターとともに再度の視察を考えている。そこで、学生が介入するニーズがあるかどうかを判断し、今後の活動を考えていきたい。

完成した紙バイオリン

有意義な時間を過ごしました

（国際学部国際学科４年　日高大樹）

エル・システマ支援～相馬子どもオーケストラ～

東日本大震災の発生以来、ボランティアセンターは岩手と宮城の両県において活発な支援活動を展開してきたが、原発の影響が懸念される福島県への学生派遣は安全を優先するために見合わせてきた。しかし、当然ながら福島県には支援ニーズがあり、「福島でボランティア活動をしたい」という学生たちの根強い声があった。ボランティアセンターとしても、原発で苦しんでいる地域だからこそ支援が必要と考え、関係機関と協力の枠組みを模索してきた。

そこで出会ったのがエル・システマだった。エル・システマは、40 年近い歴史を持つ南米ベネズエラ発祥の教育プログラムで、音楽を通して子どもたちの「生きる力」を育てることを目的としている。元々はベネズエラで学校も行けないような貧困地域の子どもたちが非行や犯罪に走り社会問題になっていたことから、そういう子どもたちを対象に実施していたが、その成果が極めて大きかったことから、その手法が高く評価され、一般の子ども向けのすぐれた教育プログラムとして、現在では世界 30 数ヶ国で展開している。エル・システマによって結成された子どもオーケストラは非常にレベルが高く、出身者の中には、ベルリン・フィルやウィーン・フィルで活躍する音楽家も出ている。

相馬市立中村第一小学校での練習風景

そのエル・システマのプログラムが、一般社団法人エル・システマジャパンと福島県相馬市が 2012 年春、協定を締結し、正式に相馬市の復興計画に正式に組み込まれることになった。原発という長期的な課題を抱える福島県の人々は風評被害をはじめ、様々な差別や偏見に直面している。その中で、心身ともに影響を受けている子どもたちの一人ひとりが尊厳を回復し、

さらに郷土愛を深め、自分に誇りと自信をもって生きていけることをエル・システマは目指している。

震災から２年が経ち､被災地への支援ニーズは時々刻々と変化している。支援する側とされる側の気持ち、姿勢、キャパシティのマッチングは非常に重要である。それぞれの提供するものは異なっても、パートナーとしての互いの歯車がうまく噛み合わないと復興の道のりを共に前進できない。

その点において、エル・システマのプログラムは画期的である。相馬市の市長をはじめ、教育委員会、音楽教師たちを巻き込んで現場で話し合いを重ね、そこに世界中のエル・システマの専門性を集めて、未来への方向を見出していく。エル・システマが自然災害の被災地域、さらには原発という複雑な問題を抱える地域でプログラムを実施するのははじめてのことだが、相馬市の子どもたちのためにエル・システマの世界的ネットワークが技術的にも資金調達の面でもバックアップをしている。

プログラムは私立中村第一小学校を核に開始されている。音楽が盛んなこの地域でも特に音楽教育に力を入れている学校で、昭和 30 年代には器楽合奏コンクールで全国１位に輝いた名門の小学校である。
ボランティアセンターは、2012 年５月にボランティアコーディネーターを相馬市に派遣、プログラムモデル校を視察すると共に、現場での関係者と話し合いを実施した。協力の枠組みを模索すべく、東京を拠点とするエル・システマジャパンの代表ともミーティングを重ねた。

明治学院大学でのエル・システマ・シンポジウム

その結果、同年７月にシンポジウム、「音楽を通して生きる力を育む：社会変革の力としてのエル･システマ」をエル･システマジャパンと白金キャンパスにて共催した。世界で展開するエル・システマの教育理念や活動事例についてベネズエラや米国のアラスカ、ロサンゼルス、コロラドから集結したエキスパートが講演し、相馬市の教育関係者もまじえての活発な質疑応答が行われた。作曲家・指揮者として名高いバーンスタインの娘さんであるジェイミーさんも含まれており、学内外に関心を呼んだ。このシンポジウムは復興に向けた革新的な支援モデルを本学の学生たちと共有するだけでなく、日本社会全体に向けて発信するという点で有意義だった。

また、相馬市内における放射線量が安全基準値内であることを相馬市役所と確認した上で、音楽教師を対象にした現地ワークショップにコーディネーターと学生１名が参加した。エル・システマの教育メソッドに基づいたレッスンを受けた子どもたちの生き生きとした姿を目の当たりにして、「生きる力」を育むプログラムの可能性を体感した。

現在、エル・システマジャパンは、「音楽でつないでいこう！」をモットーに、プログラムモデル校を相馬

市内の他の小学校にも拡大し、音楽指導者の派遣や楽器の購入、修繕などを無償で実施しており、将来的には市内のすべての子どもたちが参加できる子どもオーケストラの設立を目指している。

それを受けて、ボランティアセンターは、被災地の現場で音楽指導者のサポートにあたれる学生の育成と派遣をエル・システマと計画中である。具体的にはエル・システマの海外拠点で学生たちが長期の休みを利用して教育メソッドを直に学び、そこで取得したスキルを相馬市で実践するという流れである。学生たちは被災地を支援するためのスキルを海外で異文化に触れながら英語で身につけ、帰国後は被災地に赴いて、子どもたちの趣向やニーズに合うような形に現場の音楽指導者と共に開発をしていく。エル・システマの興味深いところは、基本理念となる 10 のコアバリューがあるものの、実践のスタイルは様々でその国や地域の文化的背景が尊重される。それがエル・システマのプログラムが世界各地で受け入れられ、拡大を見せた所以だろう。

相馬での現地ワークショップ

相馬市といえば野馬追で有名であるが、古くから民謡も盛んな土地である。伝統的に音楽のポテンシャルのある相馬市の子どもたちが郷土愛を育み、自分自身、家族、そしてコミュニティに自信をもって、未来を生き抜く力を手に入れることができたら、どんなに素晴らしいだろうか。またそういった力は、社会そのものをポジティブな方向へと動かしていく。

ボランティアセンターとエル・システマとの協力は今年度はじまったばかりであるが、既に重要なステージをいくつも越えてきた。今後、一人でも多くの被災地の子どもたちが自己実現の機会を得て、またボランティア活動に参加する学生がやりがいを感じ、自分たちにとっても学びの経験となるようなプログラムをボランティアセンターは開発していく方針である。

（仲川）

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトに参加して

学生の復興支援活動に参加して

参加したプログラムは、岩手県大槌町吉里吉里の仮設住宅支援グループの活動で、前半の３日間という短い期間、学生と一緒に行動させてもらった。ある程度実施することが決まっている支援活動を行うほかのグループとは異なり、被災地に行き、被災地の人たちの声を聞いて、自分たちの支援活動の企画内容を決めて、実行するというこのグループの学生たちの活動内容はとても大変なものだと思う。津波が日常の生活空間を壊したのみならず、被災後の生活状況・環境の違いが、人間関係（近所づきあい）も複雑にしているという事実、また被災地区同士の復興のスピードの違いがまたその地区間の差異を生んでしまっていること、そして、それ自体が復興の妨げの要因の１つにもなっているということ等、被災から時が経つ程、被災地では様々な課題が生じているという事実を知り、大きな衝撃を受け、そのような状況で学生の支援活動がどのような意味を持つのか、実態を知るほど、疑問を感じてもいた。ただ、現地の協力者の方からの「ほかのボランティア団体は時間が経つと支援活動から手を引いてしまうが、大学の学生たちはその後もずっと来て、一緒に自分たちと支援を続けてくれる。だからこそ学生たちの支援活動を支えていきたい。」という言葉と、学生たちの企画を考える真摯な姿が、今回の参加においてとても心に残った。復興支援活動に遅きはない。ぜひ勤務員も学生たちと参加できる制度を続けて欲しいと思う。

（総務部総務課　染川真由美）

わんぱく広場に参加して

学内でスーツ姿のサキちゃんに偶然会った。

「あれ、どうしたの？」「就活なんです。頑張ってるんですよ」「おぉ、頑張って！」

あれから半年が過ぎていた。日々に忙殺されているうちに知らずに薄れる記憶。今の部署では学生さんと話すことがないので、こういうちょっとしたやり取りでさえ嬉しく感じる。

食堂のそばで、リョータくんとマーくんに会った。

「あ、江坂っちだ、と思ったけど、服装が違うと声かけづらくて」「いいよ、いつでも声かけてよ」

DFS で継続的に頑張るメンバーの中に、急に割り込んだだけ、しかも外野席で口喧しく騒いでいただけのオヤジ。学生さんたちからすると、この部外者の扱いにさぞ難儀したことであろう。

それにしても。

学生さんたちは熱意を持って真摯に取り組んでいた。真剣に悩み、議論し、粘り強くプロジェクトに向き合う姿は、とても眩しく、海近い吉里吉里の熱い太陽の下で輝いて見えた。

学生さんとの距離感の難しさと、小学生と駆け回る体力のなさに悩んだ３日間であったが、それでも構わず付き合ってくれた皆さんに感謝したい。私個人としても、どういう形になるかはわからないが、今後も継続して関わりをもっていきたいと考えている。

皆さん、学内で会ったら、また声をかけてくださいね。

（総務部総務課　江坂　悠）

気仙沼復興支援プログラムに参加して

私にとって、初めてのボランティア活動。今回、大学から職員に対して復興支援プログラム参加の働きがけがあっての参加となった。震災時の生々しい映像をリアルタイムに目にし、悲惨な状況の中で救助と生活支援が待ったなしに求められていることがわかっていても、各々気持ちがあっても、足を運ぶことができないでいる人が多くいるのではないかと思う。このような機会をいただいたことに、感謝している。ちなみに、本学のボランティアセンター発足が阪神淡路大震災の時だったか、最初は横浜チャペルの会議室を間借りしての活動で、連絡用の FAX を購入するのも容易でなかったと記憶している。今では多くの学生メンバーが現地に赴き、その活動している姿は学生の成長と明治学院大学の発展が窺われる。

さて報告として、私は８月 11 日から 14 日までの気仙沼復興支援プログラムに参加させていただいた。私自身が実際に現地で作業をしたのは延べ１日（12 日後半日、13 日前半日）で、今回、宿舎として提供していただいた明海荘の敷地内の除草であった。明海荘は震災で建物やボイラー等が大きく破壊されることなく、島内の震災復興活動の拠点ともなり、今もその使命を果たしている。今回、参加した学生と私はその後方支援として、庭等の雑草の抜き取り作業を行なった。当初予想していた作業と違って軽作業でしたが、夜行バスで乗りいれたこともあって肉体的に堪えた。

あとでわかったことだが、観光目的などで島に訪れる県外の人たちによって財政的に支援になるほか、島民との会話で、心の支えにもなるようだ。そしていつまでも忘れないでほしいという願いを持っていることだ。機会をつくってまた訪ねたいと思う。

最後に、同じ仲間として接してくれた学生諸君に感謝している。

（学生サポートセンター　松下政光）